

表紙のことは：カルシュー家が住んでいた官舎

若松 秀俊

旧制松江高校のドイツ語教師として1925年10月に赴任したフリッツ・カルシュ博士が新築間もない奥谷町の官舎に住むことになった。ここで妻エツメラとの間にメヒテルトとフリーデルンが誕生し、1939年3月まで住んだ。彼の優しさと学問的影響をうけた生徒の中から傑出した人物がたくさん輩出している。1937年4月に隣家のウッドマン家から出火したが、近所の日本人が総出で荷物を運び出した。鎮火後には鉛筆一本も欠かさずに元に戻されたエピソードは奥谷町の誇りであった。当時、この地は遠い外国との接点であった。近所の小学生が学校の行き帰りにこの家の前を通って様子を窺った。目にした食べ物、洋服、習慣は彼らにとって驚きであった。残念ながら、今この洋館の老朽化は著しい。

(会員 東京医科歯科大学 医学部 教授)

Die ehemalige Wohnung der Familie Karsch

Im Oktober 1925 kam Dr. Fritz Karsch als Deutschlehrer an die Nationale Hochschule in Matsue, wo er mit seiner Familie bis März 1939 gewohnt hat. Im April 1937 brach in seinem Nachbarhaus ein Feuer aus, mit Hilfe seiner japanischen Nachbarn konnte Dr. Karsch all seinen Besitz in Sicherheit bringen. Damals war die Wohnung ein Treffpunkt für Japaner und Ausländer. Die vorbeigehenden Schulkinder der Nachbarschaft betrachteten seine Wohnung voller Neugierde und interessierten sich für das Essen, die Kleidung und die fremden Sitten. Gegenwärtig befindet sich die Wohnung leider in einem sehr schlechten Zustand.

「表紙作品」募集のお知らせ

本年(2001.1)より新たな試みとして広く会員の読者の皆様から本誌表紙の作品(写真と説明)を募り、出版・広報委員会で選考の上掲載しております。写真の主題は自由ですが、なるべく日独交流に関係する写真が望まれます。A4判用紙に表紙写真を添付し、説明書き(タイトルは日独両語で、説明は300字以内)を記載の上、住所、電話番号、氏名、職業、年齢を明記し、〒102-0083 東京都千代田区麹町5-1(NK真和ビル9階) 財団法人日独協会 出版・広報委員会「Die Brücke」編集部へ郵送してください。持参も可。締切りは毎月末まで。採用の際は協会図書を贈呈いたします。今後ともふるってご応募下さるようお願いいたします。

(出版・広報委員会)

ページ

目次

論壇

二十一世紀の幕開けの日独関係

公使 フォルクマー・シュテッカー 1

時評：時事問題研究会報告

欧州の石炭・エネルギー税に係るドイツの科学技術への期待 2

石炭利用総合センター国際協力部参与 長田 信夫

日独協会を背負った人々 6

協会活動/日独交流 7

日独協会・日独協会の活動 8

ベルリン日独センター短信/たより 11

企業ニュース/会員のひろば 13

催物案内 15

<編集後記>

■寒間にしてカルシュ先生の名を初めて知った、と思ったら功績の埋もれた人物ときく。ブリュッケ誌上での詳述が待たれる所以である。

それにしても旧制高校に見る師弟間の交流の深さに、羨望を、私は覚える者である。学業生活の中で私は、恩師と心から呼ぶ人に終ぞ出会うことがなかった。警咳に接すなどという言葉は、今や文字通り「形骸」化した言葉なのかも知れず、薫陶などという単語も、自ら経験することの少なくなったものなのかも知れない。「人格」対「人格」の師弟関係。羨ましい限りである。これは、発信者としての師の側に問題があるのか、それとも受け手としての弟子の問題なのか。或いは時代の空気か。

松江のカルシュ博士。一体どんな先生だったろう。思い出の中のカルシュ先生。逸話の中のカルシュ先生。或いは未刊の遺稿にみるカルシュ先生。

興味惹かれるカルシュ先生である。(小)